

# 銀

箔で仕上げられた、これまでに見たことのないフラワールベースに、目を奪われる。

花瓶といえは花瓶だが、より正確にいえば、技法も発想も、フレームすなわち額縁にほかならないのである。植物を、その茎の美しさにいたるまでみずみずしく引き立てる、額縁なのである。

三方からティッシュを白い花のよつにとりだせるケース「フラクシネロ(白鮮花)」も、ティッシュボックスのまったく新しい姿を見せてくれる、額縁。360度回転させることができるマガジンラック「カルセロ(回転木馬)」も、雑誌を楽しいオブジェとしてディスプレイする、額縁。

ユニークなインテリア製品の基本が、あくまでも額縁である、というゆずらぬ姿勢から、タフな知性と技術に対する絶対の自信が伝わっている。

知性の持ち主は、金田宏司さんである。数年前、お父様の金田明治さんから(今年で)50年続く額縁の家業を継いだとき、数々の名画に對峙し真剣に額縁を制作しながらも、考えた。

額縁って、そもそも何だったの？ 宏司さんは、額縁のルーツをどこへ、たどってみた。

そしてわかったことは、額縁はもともと、建物のフレーム(骨

格)であったということ。壁画として建物に描かれた絵画を、梁や柱が額縁として引き立てていたのである。14世紀のルネサンス時代に、絵画が一枚のパネルとして持ち運べるようになり、絵とフレームが、建物から独立した……。フレームが本来、建築の骨格となる梁や柱であったとすれば、現代の建築空間でも、脇役ではなく、インテリアの主役として生かすことができるのではないかと。

そんな「根源を問い直す」発想から生まれたのが、額縁作りの技術を生かした斬新なインテリアフレームというわけである。FRASというブランド名には、Frame

プラスSpaceあるいはStyleというニュアンスをこめた。コンセプトも「Not a Frame, but the Frame(ふつうの額縁じゃないけど、まきれもなくこれも額縁)」と、スタイリッシュな額縁宣言になっている。

「フレームという制約があるからこそ、自由なデザインの発想が生まれるのです」と額縁の無限の可能性を説く宏司さんを、隣で見守るお父様の明治さんはいえ、やはり「人と同じことをやるのはいや。最初にやるならオレがやる」という熱い情熱の持ち主である。

息子さんの新しい試みは、いかがか？ 賢くなったのでしょーう？ 「やびこやばあったけど、抵抗は

ない。こいつは、ビジョンをもって、私以上の感性でやってくる。新しい時代に合わせていくとはいえず、原点はあくまでうちの技術やし」

「原忠」となる大阪の工房では、「木を切り、組む」職人、「彫って造形する」職人、「色を塗る、装飾する」職人、「箔をはる」職人……とそれぞれの分野で「ばりばりの」職人さんたちが、息をのむような精巧な手仕事をこなす。70歳を越えるかたも多いが、みな明るくて元気。うちでは年寄りがみんな若い。楽しいことをやっていると「

と明治さんはほほえむ。

明治さんの代からこの工房で働いている職人さんたちから見れば、宏司さんは幼少時からよく知っている「ぼっちゃん」でもある。代を継ぐにあたって、宏司さんは「職人さんたちになめられずに指示が出せるように」、夜半、必死に額縁作りの技術を磨いた。そんな人知れぬ努力はおのずと風格や頼もしさとなって現れるのだろう。

宏司さんの新しい試みにも、職人さんたちは「なんやかや言いながらも」ついてきてくれる。

額縁のルーツ、自分の仕事の原点、と根源を徹底的に大切にすることからまったたく新しいものを生み出す姿勢には、自称、語源フェチも心から共感を覚えます。どきどき

くさくまぎれていけば、Frameの語源には「そこから何かをひきおこし、促進する」というニュアンスがある。Frameは兄弟にあたることば。フレームを設置すれば、秩序な構造物なりアートなり、そこから何か新しい世界が生まれ、開けていくわけである。

「何をしようとしているのか、意図がわからない仕事は許せん(笑)」と語る宏司さんの、根源と未来をしっかりと見据えたフレーム・オブ・マインド(心構え)は、さらなる未知の可能性を切り開いていく勢いです。■

中野香織 文  
FUKUCHI KAORI 写真  
福知彰子 写真  
photographer Akiko Fukuchi

# 額縁

Who's who ②

金田明治 76歳  
金田宏司 46歳



(前列右より)  
妹尾昭 73歳  
金田明治 76歳  
谷川八重子 57歳  
(中列右より)  
阪口美仁 57歳  
芦田貴 63歳  
飯島聖子 28歳  
金田和子 74歳  
中村進治 64歳  
(後列右より)  
金田宏司 46歳  
林秀安 65歳  
卜部啓一 58歳

